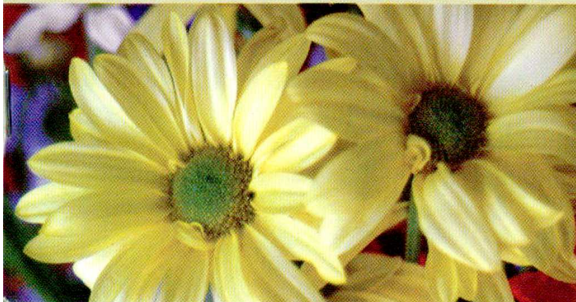
命の本質

マウラナ　ワヒドッディン　カン

REALITY OF LIFE (JAPANESE)

１私たちは、どのように天国へ入るための資格をもてますか？

現世の審判では、どの男女も天国に入るには２つの資格が必要です。１つは、真理を認めること。もう１つは、義にかなった生活を送ることです。そのような男女は、この試験で資格を持ち、楽園の地を与えられるでしょう。そこでは、彼らのすべての願望が満たされるでしょう。

現世では、人間は自分を完全に自由だと思っています。しかし、この自由は実際には彼に属しているのではなく、むしろ試験のようなものなのです。人間は、神の唯一性の真理を認め、神に服従しなければなりません。強制ではなく自分自身の選択によるのです。神の唯一性という真理を前に服従するということは疑いなく、誰にでもできる最高の自己犠牲なのです。神の唯一性を認めることは、神と同じように他人に対しても自分を低める行為

のようです。しかし、これこそ人間を最高の地位に高める美徳なのです。それは、人間を必ずや天国の入り口に導くことでしょう。

２番目に重要なことは、義にかなった生活を送ることです。一般に、人間の性格はその感情によって形成されます。怒り、報復、嫉妬、嫌悪、競争など、それらは人間の性格を形成するのに負の感情です。しかし、人間はそのような感情に訓練されなければなりません。人間は、外部の刺激の影響で人格を築くべきではなく、自らの判断によるべきです。人間は、高潔な義の基準の上に人格を確立すべきです。これが神性と呼ばれるものなのです。

２神の創造の計画に対しての正しい理解

この神の創造計画によれば、人間は、試練の一部として　生涯を通じ、日々苦難に直面しなければ

ならない状況におかれています。誰もこの試練と苦難の人生から解き放たれる力はありません。この計画は、現世は贅沢で居心地よい場所として整えられているのではなく、むしろ、試練の期間として、人間が天国で永遠の命を得るに相応しいか否かの判断に役立つものとして造られてきたという事実を、人間に思い起こさせるためにあります。

現代世界のすさまじい発展にもかかわらず、有害な状況がたくさん目に付きます。しかし、人々は、神の創造の計画に気づかず、なぜ、これがまん延しているのかを理解していません。それで、彼らは状況に対して逆の反応を続け、そのように応じることで、神の目に彼らのために設けた試験の失格者であると自認しているのです。ストレスもまた、どこでも人々に向けられた大きな問題です。ストレスを排除することができるとする多くの研究所が設立されてきました。そのような研究所が、

ストレスに病んだ人々に対して実際していることは、彼らに自らの考えをやめるよう求めることです。そのため、彼らに一時的に麻酔をかけます。しかし、これはストレスの問題に対して本当の解決にはなりません。この問題には、たった１つ真の解決があります。それは、ストレスを排除しようと、またそれに逆に反応しようとする代わりに、ストレスに対して、正しい態度で向き合うことです。ストレスを管理する態度ということです。そうすれば、試験に合格します。不愉快なことは、この世で人間がそこから正しい教訓を学ぶためにおかれてきました。苦い経験によって教えられた真の教訓は、人間は次の楽園の世の報償を思い描くということです。

この創造の計画の光に見られるように、人間の動きからみると、すべての人間の問題の根源は、見識のない人たちは、死ぬ前に現世で楽園をほしが

るということです。しかし、自然法のもとで、この地球の状況では不可能なのです。神の創造の計画により、死後、確実に彼のために備えられた楽園をもらえるように、人間は死ぬ前にこの世に満足すべきなのです。ですから、人間がなすべき正しく好ましいことは、この創造の法を認め受け入れて、自らの生活をこれに即し設計することです。現世での人間のたった１つの目的は、死後の永遠の世界で楽園に入ることを許されるための資格を与えられるよう、自分自身を神の目に好ましくすべきです。成功者は、この仮の世にすでに永遠の世を認識している者なのです。つまり、現世の失敗に、次の永遠の世での永遠の成功の秘訣を見出す者なのです。

３最も重要な問題

“今日の人間に最も重要な事柄は何ですか？”

もし、一群の人々に次のように尋ねれば、様々な人々が色々な答えをするでしょう。或る者は、核兵器の拡散が最大事だというかもしれません。また、或る者が、公害や爆発だといえば、他の人々は、生産と福祉の貢献が　至上の問題だというかもしれません。そのような意見の相違は、一般的に人々が自分自身を的確に認識していないことを示しています。認識していれば、人類が直面している最も危機的な問題は、人間が実存を無視しているところにあります。

人間は、ある日、死を迎え、創造者の前に精算のために呼ばれるという、避けられない事実を無視し続けています。もし、人間が実存に気づくなら、現世より来世にこそ注意を向けるでしょう。夕方、ラッシュアワーの混雑した交差点に立ち、人々が急いで向かっているものを見れば、現代人が，基本的な問題として何を選んできたかが 分かる

でしょう。なぜ　通りには、交通の流れが絶えないのでしょう。なぜ商売人は店を飾るのでしょう。なぜたくさんの人々が行きかうのでしょう。人々の会話の主題は何でしょう。それぞれの会合の真の目的は何でしょう。何に一番関心があるのでしょう。彼らの素晴らしい才能と資産を何のために費やすのでしょう。人々は、それらから何を得るのでしょう。家庭から、そして、それで何をもたらそうとしているのでしょう。もし、この質問に答えられるなら、あなたはまた、人間が生活の基礎に選んできたものがなんであったのか、そして、人間が到達しようと努めているものが何なのかを正確にたどることができるでしょう。

現代人は、ただ、自分の欲望の満足を追い求めているだけであることが、すべての人に明らかです。手にしたいのは来世より現世そのものです。彼の幸せは、世界の野望の成就にかかっています。

一方、悲しいことに、彼は見かけ上、このことも理解していないという事実です。日々の成功の概念は当座の日用品の獲得物や、余暇の楽しみや、人気者として歓迎されることです。一方、彼にとって失敗とは、それらの物が奪われることを意味します。これが、全人類が追い求めているものです。誰も明日のことは気にかけず、みな、今、今日この時に、割り当てを得ることに死に物狂いになっています。

この事物の体制は、大都市だけではなく、最も小さな人間の定住地でも広く行き渡っています。人がどこへ行こうとも、人々は同じようにとりつかれています。男も女も、富者も貧者も、老人も若者も、都会も田舎も、宗教心のある者もそうでない者も、すべてがこの同じ方向に走っています。人間は、現世の利益の祭壇で、それらのために彼の信仰と良心を犠牲にさえする用意があります。

彼の苦労は、現世の終末のみにあり、この苦労が何を引き起こすかは気にかけていないのです。しかし、このように得られたすべての成功は、つまらなくありふれていて、来世には役に立たないでしょう。来世の出費で現世の地位固めに気を配るものは、老後の備えを気にかけない若者のようです。実際に、足がなえ、苦労に向かなくなる時がやってきます。突然、彼は苦境に気づき、もはや自分の世話さえできません。同じことが、私たちの死後の生活にも言えます。すべて私たちは、あまりに現在の地位を固めることに関心がありすぎます。明日のことを考えるものは誰もいません。私たちの周りのすべての人の死を目の当たりにしても、それでも、なお、刺激されて行動に移ることはありません。戦争中、空撃のサイレンの音が響き、ぞっとする叫びの中で、"敵の爆弾をつんだ飛行大隊は、この都市を完全に爆破するため 近づ

いている。防空壕までいそげ！” との、宣告があると､みな､すぐ防空壕までの最短ルートを取り、とたんに込み合っていた通りには人の気配もなくなります。このような行動にでないものは、正気ではないと考えられます。

しかし、世界の主が、私たちにしかるべき警告を与えてこられたものに関して、もう１つもっとひどくて避けられない危険があります。そして、それに対して、私たちは少しも考えようともしません。この警告とは何ですか？それは、世界の主の警告です。神は人類に対して、預言者を通じて神の至上命令を宣言しました。“私を崇拝しなさい、おのおのの義務を遂行し、わたしの意に従って生きなさい。私は、これを仕損じたものを想像もできない方法で罰するでしょう。”すべての人々がこれを聞き､それを口々に認めたけれど､一般の人々は、“結果のない” 一件として、それを扱っていま

す。人々は、現世の利益を利用するため、様々なかたちの軽犯罪を犯しているのです。しかし、来世の利益にたいしては、人々は適切な行動をとることにあまり関心がありません。このようでは、人生の隊商は無意味に報償のない地点に向かって進んでしまいます。人々は、軍本部から発したサイレンの響く音に反応し始めますが、宇宙の主が、人類のために与えた危険のしるしには、何の重きも置きません。その音にあわてるどころか、だれもその歩調をかえさえしません。

この嘆かわしい事態は、どうしたことだろうか？それは、ただ単に、軍本部のサイレンが　私たちに警告する危険は、この世のものであり、私たちにも気づくことができます。それで、皆、これに気づき、その効果がすぐに感じられると知っています。これに対して、神が私たちに促してきた危険は、来世にのみ気づくでしょう。死の壁が、

私たちとその現実の間に立っていて、私たちの目はそれを見通すことはできません。ですから、人々はすぐに、空撃のサイレンに応じるけれども、神が私たちに十分な警告を与えてきた災害について聞いても影響も受けず、冷静なままでいます。絶対に確実な彼らの運命を伝えるニュースにも心を動かしません。このようだから、彼らは自分の罪を償い、正しい生活を送り始めるよう励まされているのがわからないでいます。

神は、外界を認識する２つの目を私たちに与えただけでなく、認識の水平線を越えたところにある見えない現実に目を通すことができる第３の目もまた与えました。この第３の目は、私たちの知性の目です。知性を働かせない人々は疑惑の状態にとどまります。彼らは、現実、２つの目を通して見るものと思っています。それで、もし彼らが物事に熟考するなら、見えるものより見えないで

いるものについてさえもっとはっきりしてくるでしょう。誰もが認める１つの現実とは何ですか？死は、この質問に対してすべての人が一致する答えに違いありません。死とは、誰もが仕方なく受け入れなければならない現実です。死は、いつでも、誰にでも突然降りかかることは、皆知っていますが、死について、人々が考えるとき、死について彼らが思うことは、つぎのような家族の心配事です。“私が死んだ後、子供たちはどうなるのだろう？”実際、彼らの生活の多くが、子供たちの将来の保護に費やされます。しかし、彼ら自身の先の生活を保障するための努力は、なにもなされていません。彼らの態度から、あたかも子供たちだけが彼らを生かしているかのように見え、そして、彼ら自身は存在せず、それ故、実際彼らのためには何の用意もないのです。彼らは全く死後の生活があるという事実に無頓着です。しかし、

実は本当の生活は、死後にこそ始まるのです。彼らが埋葬され、実際、他界に案内されるとき、もし人々がそれに気がつきさえすれば、彼らは子供の将来よりむしろ自分について、もっと心配になるでしょう。これは、大抵の人々は宗教的な傾向にあろうと不可知論的な傾向にあろうと、死後の生活について確信してないからです。２つの要因が人に死後の生活について疑いを持たせます。第１に、死ぬと人間は皆、塵に帰り、彼の肉体のすべての形跡は消え去ります。それでは、彼はその後どのようにして復活できますか？第２に、死後の生活は私たちには目に見えませんが、一方、今日の世界は観察できる現象です。ですから、もし誰も実際それを見たことがなければ、どのように、絶対の信頼をその到来におくことができますか？次に２つのこれらの異議を見てみましょう。

4死後の生活

“死ぬと、私は再び起こされるのだろうか？” この疑問は、死後の生活の現実に深い確信を持たない人たちの脳裏にさえあります。しかし、実際には、現世にいる間は、死後の疑問に正面から注意を向ける人はほとんどいない状態です。これは実に、その存在についての疑問が意識的か、無意識的かを示すものです。しかし、もし私たちが死後の生活の現実について真面目に考えるなら、それは簡単に理解できます。神は、私たちを試練におくことを望み、私たちに直接死後の生活についての秘密を明かしてきませんでした。しかし、神は、私たちが見てそれについて熟考するよう宇宙のいたるところに、彼のしるしを散りばめました。このことは、私たちを神の真の現実と、私たちをとりまくすべての物事の本質へと導きます。この

宇宙は、真にその中に次の世のイメージを見上げることができる鏡です。

人間は、常に現在の状態で存在するわけではないといるのが一般論であります。人間は形のない本質から出て、母体で成長するにつれだんだんと人間の形になります。この過程は、外界で完璧に人間に発展するまで続きます。無感覚で無価値な物質の変態が、目には見えないほどほんのわずかに６フィートの身長の人間になるまで毎日くりひろげられます。では、どのように、私たちの肉体の非常に小さなかけらが地面に撒き散らされたあと、もう一度人間の体になるかの理解に苦しむことがあるでしょうか？実際、動き回っている一つ一つのものは数え切れない原子の集まりで、以前、地球と大気中の未知の次元に散りばめられました。やがて、自然の力が、考え、感じ、そして動くことができる人間の形の中に、今、これらの同じ

撒き散らされた原子を観察することができるように、これらの原子を一つの意味のあるすばらしい形に集めました。私たちの死の直後、私たちのかけらが空中、水中そして地球に放散されたとき、まったく同じ過程が繰り返されます。その後、神の命で、それらは組み換えられ再び想定した人間の形になります。以前一度おきた事柄が再び起こることがそれほど異常なことでしょうか？

物質の世界ですら、生命の繰り返しの実行可能性のしるしがあります。毎年、雨季には野菜がよく育ち、緑が一面に広がります。それから、夏が終わりを告げ、地が乾きます。花が咲いていたところには、不毛な地しか見渡せません。つまり、完璧な生活は終わります。しかし、また雨季がやってきて、そらから雨が降り出すと、野菜が再び育ち乾いた土地はまた牧草地になります。まったく同じように人は死後、生命の復活をみるでしょう。

これを、もうひとつの角度から見てみましょう。私たちの想像は、現在の肉体の存在に照らし合わせて表わされているので、死後の生活に関していくつかの疑問が起きます。私たちにとって、動く姿が本質的人間であることが、見かけ上はっきりしていると考えています。それから、この形が一度、腐り地で混ざり、どのように同じような形につくられ、再び起こされるのかを不思議に思います。死に襲われると、活気ある人間もおとなしくなるのに気づきます。彼の動きは止まり、すべての能力は機能しません。その後、彼は関わりのある人達の習慣によって、土に埋葬されるか火葬されます。時間がたつにつれ、その肉体は普通の目には見えないような方法でちいさなかけらになり、地と混ざっていきます。私たちは、このように、人間の死滅を日々目撃し、そのように完全に消え去った 1 つの形を、どのようによみがえらせる

ことができるかを、完全に理解するのは難しいと思います。

事実は“人間 ”という言葉は、そのようないかなる肉体の形ではなく、むしろ体に宿る“魂”を指し示しています。人体の構造に関する限り、私たちは、生きている細胞と呼ばれる小さなかけらで構成されていることを知っています。私たちの体の細胞の配置は、ビルのレンガのようなものです。私たちの体の構造のレンガや細胞は、私たちの日々の生活のために壊され続けています。そして私たちは、この不足を食物摂取することで補います。食物は一度消化され、いろんな形の細胞を産み、この体の不足を埋め合わせています。このように、人間の体は常に破壊され改造されています。古い細胞は壊され、新しい細胞が取って代わります。このような過程が毎日続き、通常１０年以内に、遂に肉体全体の修復が起こります。言い換え

れば、どんなものでも、１０年前あなたが持っていた体で今残っているものは何もないのです。

あなたの今の体格は完全に新しいものなのです。もし、去る１０年の間あなたから断ち切られたすべての部分が一緒に集められるなら、あなたと同様のもう一人の人間が作られるかも知れません。もし、あなたが１００歳なら、１０人のあなたが作られるかもしれません。そして、それは外見上、あなたにそっくりではありますが、生命のない肉の塊以上のなにものでもないでしょう。なぜなら“あなた”は彼らの中には宿っていません。“あなた”はそれらの古い身体をすて、自分自身を新しい骨格に形作ってきました。ですから、形成と破壊の過程が起こってはいるが、はっきりした変化もなく、絶えず“あなた”の中で、行われています。あなたが自身と呼ぶ存在は過去のものとして残ります。もし、あなたが１０年前の誰かと契約

を結ぶなら、“あなた”はこの方法であなた自身をゆだねるということを認め続けるでしょう。あなたの前の骨格は、今は存在していないけれど、契約書にサインされた筆跡も、そのために保証された証言もないなら、もはやあなたの体に当たるものはありません。しかし、“あなた”はまだ存在し、この１０年間の契約は、あなた自身のものでそれに従い続けるという事実を認めています。これは、少しも肉体的変化とかわらない働いている内面的人間が、数え切れない体の変化を、全く完全なまま生き残っているということです。それで、私たちは、“ホモ　サピエンス”という言葉は、その死で消された、ある確かな肉体の形につけられたラベルというよりは、むしろ、体の合成部分の拡散の後でさえ完全なままで残っている別の存在です。魂は変わらないが体は変化するという事実は、体の移行性と魂の永遠性の決定的な証拠なのです。

惑わされた人たちは“生”と“死”は、多数の物質のかけらの“集積”と、その後の“拡散”であると考えてさえもいます。*Chakbast* というウルドゥー語の詩人は、次のような言葉で詳しく述べています。

Zindagi kya hai, anasir mein zahoor-e-tarteeb
Mauwt kya hai, inhi ajza ka pareshan hona

ー命とは何ですか？秩序に自らを整えている諸要素の集積、そして、死とは？それらの拡散ー

しかし、この記述は、事実から生まれたものではありません。もし生命が、単に、“秩序に自らを整えている諸要素の集積”であるなら、生命は、このよく整った状態がもちこたえる限りのみ、生き残るに違いないという事になります。そして、逆に、専門の科学者がこれらの諸要素の集積により生命を創造することができるはずです。明らかに、

これらの命題のどちらもばかげています。死んでいる人は、事故で手足を引き裂かれた人達だけではないことに気づきます。どんな状態でも、どんな時代でも、人々は去り行きます。ときには、健全な人間も突然の心臓疾患に病み、そして亡くなり、医者はそれに対して説明も与えることができません。私たちは、死体を“整った要素の出現”とみなすかもしれません。しかし、その中に宿っている魂はなくなっています。すべての元素が２、３分前にあった同じ秩序に整えられます。しかし完全に死んでいます。このことは、元素物質の組織は生命を創造しないということを示しています。むしろ、生命は全く別の存在なのです。

生きている人間は、そのような肉体の形は簡単に形成されるけれども、実験室で生まれることはできません。私たちは、生きている肉体のかけらは普通の元素で成り立っているということを確かめ

てきました。その中の炭素は石炭に見られる元素と同じですし、その水素と酸素は、水を構成する元素に同じであり、ニトロゲンは大気の多くを説明する、それと全く同じガスです。しかし生きている人間は特別な方法で整えられてきた普通の原子の特有の集まりというのは本当ですか？また、これ以外の何ものですか？科学者たちは、肉体はある物質のかけらで作られているということを私たちは知っているけれど、まだ、これらの同じかけらをただ組み合わせることで、生命を創造する立場にはないということを認めている。これは、生きている人間の肉体は、ただ単に、生命のない原子の集合体ではないということをはっきり示しています。それはむしろ、“生命”と“原子”の組み合わせです。死後、その“原子”の集合体は目に見える形で残ります。一方“生命”は、もうひとつ別の世界へ旅立ちます。

明らかに、“生命”はなくせるようなものではありません。私たちが、生命は永遠の富を持つ何ものかであるということをつかむとき、“死後の生活”の理論がまさにいかに合理的で自然であるかを受け入れることができます。生命は、単に、死に先だって見られるもので成り立っているのではないという事実が強調されます。ですから、死後の生命もあるに違いありません。私たちの知性はこの世界の一時的な性質を、そして、人間はそれを生き残る存在であるという事実を受け入れます。私たちが死ぬと、私たちは無意識の中を通過するというよりむしろ引退してもうひとつ別の世界に住むのです。

このことを理解して、たくさんの人々が今日、神と来世を信じています。あたかも、彼らは、それらのことを否定していないかのようです。しかし、彼らは彼らの信条にあった行動をなんらしていま

せん。実際、そのような人々は皆、“この世の成功”に関心があります。ひとつの例を手がかりにこのことを理解してみましょう。もし地球に引力がなくなり、惑星が太陽の方角に一時間に６，０００マイルのスピードで引かれていくなら、何が起こると考えられますか？このことが2,3週以内に、すべての生命は地球上から消し去られるだろうということを暗示するように、間違いなく世界全体、すべてが完全にパニック状態になるでしょう。

しかし、この世界が絶え間なくこれよりもっと大きな危険に直面しているということに、誰一人気づいていません。この危険とは何ですか？それは、人間がこの世で彼のなしたことの精算のために呼ばれる最後の日の危険です。それは、宇宙の創造以来世界のために運命付けられてきた日で、私たちはみな、向こう見ずなスピードでその日に向かって疾走しているのです。信仰箇条のひとつと

して、私たちの多くはこの現実を受け入れています。しかし、実際、むりにそれをまじめに考えるよう余儀なくされていると感じる人は、全くほとんどいませんし、死後のための準備が必要と考える人さえ少ないのです。

5私たちは、どのように裁かれますか？

私たちが、どのように“裁かれるか”を理解するために、人間の行動は２つの分類のいずれか１つに入るということを理解するのは大切です。最初のものは、どんな“道徳的”選択もなされない問題を含んでいます。それらは、良かれ悪しかれ、全く偶然の出来事で、その結末は、それらが“目的に満ちた”要素をもっていないので、道徳的な見地から判断できません。２番目の分類は、広く複雑に絡み合っている行動範囲、つまり、実行される前に綿密に目的を持って考慮されなければならない、“正しさ”と“誤り”を扱うので、性質上、

大変異なっています。これは“道徳的な分類”です。この２つの違いを理解するために、木の枝に不安定にバランスをとっている１個の石を例にとりましょう。もし、その下をあなたが歩けば、それは落ちてあなたに当たります。その後気づくと、あなたはひどく傷を負っています。あなたはその木に当たり、それに対して恨みを持ちますか？もちろん、そんな事はしません。しかし、想像してみてください。ある男が、あなたに怪我をさせてやろうと、石を拾いあなた目掛けてそれを投げ、そして、実際そうしたとします。あなたは激怒し、そのような仕方ですぐに仕返ししたくなりませんか？その行為は、“意図的”なものだから、悪行は“罰せられるべきだ”という思いで、あなたは完全に正当化されるでしょう。ここでは、それは、ただ単に、ある無作為の出来事についてではなく、正誤の行動、善悪の意図、ひと言で言えば、“道徳”

についての問題です。

この点を明らかにするために選ばれた例は、簡単な性質のもので、行為の結果がすぐに明らかで、その上、2番目の場合、即道徳的判断が可能です。しかし、生活の中で、悪行が発見されず、その効果が隠ぺいされ、長い間先送りにされるかもしれず、そして、犯人が、社会の道徳的非難によって、または、法廷でも決して記録にのらないかもしれない、他のもっと複雑な状況があります。もちろん、ときには、人々はそのような悪い行為に気づきます。しかし、邪悪な者は　非常に賢く臨機応変の才に長けているので、彼は罰を逃れることができます。また罰を押し付けるに要する人間の機転が足りなくて、悪い行いの人は無罪放免となります。ただ、そのような理由で、犯罪はしばしば繰り返されます。しかし犯罪人は、彼がたくらみに成功し逃走できたとしても、すぐ喜ぶべきでは

ありません。なぜなら、人間が、審判の日に創造者による精算のために呼ばれるのは、まさにこのタイプの行為なのです。彼が、どんな人生の歩みをたどってきたかに関わらず、みな、作り手の前に立ち、神の前に、彼の生涯を全く顕わにすることを求められるでしょう。“道徳的分類”に入る行為の根拠に、そしてそこで、道徳的教訓や良心のとがめが優先し重要になれば、楽園に案内されるか、あるいは、地獄の炎穴に投げ込まれるでしょう。もし、このことが、この世で彼から隠されたままであれば、それは、人間を“裁判”にかけるための、神の計画なのです。もし、彼が、すべてこれについて知っているなら、彼の裁判は意味のないものになってくるでしょう。

人間のすべての行為は、彼に対する何らかの結果を持っていて、気づいてみると、彼は“好ましい”または“好ましくない”反応を併せ持っている

状況です。ですから、どのように、そのような状況に対処し、彼の能力を駆使するかによって、彼自身を“形成”しもすれば“破壊”をもします。もし、彼が、“好ましく”対処するなら、彼は試験に合格し、“好ましくなく”対処をするなら、失格します。

6 死後の世界とは?

つまり、死後の世界とは、彼の道徳性による彼の行いのすべての結果を刈り取るところです。私たちが、死後の生活を考えるとき、この時点で2、3の疑問が起きます。人間はどのように、この死後の世界の存在をとらえることができ、そして、そのために、どのような備えをすべきですか?これに答えるのに、音を例にとって見ましょう。例えば、音は裸眼では見ることができない波の名前で、人間の声は舌と喉頭の動きの結果であること

は誰もが知っています。これらの音や声は、大気中に残される一種の見えないパターンを形成します。科学的理論によれば、人間によって発声されたどんな音や声も数千年前でさえ、私たちは、それらの波を見聞きしませんが、まだ、波の形の中に存在しています。しかし、もし、私たちがそれらを発見するための装置をもっているなら、それらはの形に正確に再生できるでしょうし、そのうえで、多くが歴史的議論になり、私たちも耳にすることができるでしょう。

あたかも私たちは、すべての音と私たちの言葉が刻まれている空気の毛布に包まれているようです。私たちは､空気に刻まれたことさえみえませんが、そのように、他の世界もまた四方から私たちを包んで、絶えず私たちの意志や計画を記録し続けています。私たちの行為はそのひだに刻み込まれています。そして、死後、すべての人たちが読める

ようにそこに保存されるでしょう。ターンテーブルの上に静かに回っているレコードを想像してみてください。レコード針が溝に触れるやいなや、あたかもその上に記録された音を表現しようと待っていたかのように、沈黙していたディスクは急に音楽を奏でます。同様に、私たちの行為の“記録”は用意されてきていて、宇宙の神が命令の言葉を出すとき、全記録が私たちに対して巻き戻されるでしょう。それを聞いて、人々は無意識にこう言うでしょう:“最も小さなことも大きなことも抜け落ちていないなんて、これはどんな類の記録の本ですか?”

7 精算の概念

神は、人間にとって絶対必要です。人間の生活は神なしでは不完全です。ある哲学者は、神がいなければ、私たちは神を作り出さなければならない

だろうと的確に述べました。幸運にも、神は現実に存在します。私たちは、想像ではなく、事実として、確信を持って神を信仰することができます。そして、私たちは、生活の中から神を理解できます。本来、人間は、できる範囲で生活管理のすばらしい方式を持つべきことは重要です。神はまさにそのような生活管理のための完全な原則を与えています。

人間は、機械的なシステムによって統制されている機械のようでも、本能によって統治されている動物のようでもありません。人間は自由を享受しています。彼らは、自らの自由意志から彼らの行動を決めます。そこで、どのように人間を正しい道に歩ませるか、どのようにして彼の振る舞いを首尾一貫してしつけるかについての質問が起こります。歴史は、これに関するすべての世界の対策で、社会的圧力、土地法の強制や改革者の訴え

などは効果がないことを示しています。

経験は、全体的に効果がなければ、社会の圧力は限られているということを示しています。法には、非常にたくさんの抜け穴があり、悪行者が抜け道を見出すのは難しくはありません。人々を改革する改革者の挨拶は訴えに過ぎず、そして、訴えだけでは人間の生活に何の革命ももたらすことはできないのです。

規律にかなった振る舞いの達成にとって、人間が、彼自身よりずっと卓越した力の存在、つまり、どんなときも人間の活動を気遣っているお方について確信することは不可欠です。人間に報いと罰を与えることができるお方、そして、神からは逃げることができません。この種の存在はただ１つであり、それは神です。神の信仰は、同時に２つの特質で機能します。一方では、人間は、神の中に、彼のすべての活動を気遣い、そして彼を罰する

無限の力を持っている守護者を見出します。人間は、神の罰から逃れることはできません。神への信仰は、人間に、公私両面のすべての状況で、しっかりと好ましい態度をとることを余儀なくさせます。そのときだけ、彼は神の怒りから自身を救うことができます。

もう１つの点は、神を信じることは、限りない希望の宝庫です。もし、彼が真実の道を歩むため何かの損失をこうむったり、また、もし彼が何かほかの災難に悩まされているなら、彼は勇敢にそれに耐えることができるだろうことを確信して、この世で生活を送ることができます。なぜなら、もし、彼が真実の道に固執するなら、神は彼に永遠の楽園の形で報償を賜るでしょう。そしてこれより大きな報償はないに違いありません。人間が自分自身を道徳的価値に縛ったり、また義に固執することは、彼自身不可能です。これは、彼が上位

の力、完全なまでに義を見定める優れた力の下にいるという事実を確信しているときのみ可能です。神にとって、人間を正しい道に導くこと、そしてまた、この正しい道から逸脱するものたちを罰するのも十分に可能です。この現代の限りある世界は、犯罪を罰するには全く不十分です。同様に、この世界は人の善行に対して報償を賜るのにもまた不十分です。神の概念が私たちに告げているのは、神は現世のすべての限界から解放されたずっとよい世界を創造することができます。そこでは、報償も罰も共に満足のいくまで与えられることができます。

生きた力に満ちた神の概念は、当然、精算の概念を伴います。そして、精算の概念は人間の側の正しい考えと行動を保証します。それは、人間に神の罰を思い起こさせることで人間を注意深くします。さらに、このことは、彼がすべての状況で

すべてを費やし、正しい道に固執するなら、彼に神の報償を授かるという確信をあたえます。

神の概念は人間に損失が利益に変わり、災難がそれと共に善潮をもたらすという思想を与えます。

８人間よ、現実を認識しなさい！

ちょっとの間考えてみてください。あなたには、無限の命が運命づけられています。死は決してこの一生の終末ではありません。それは、新しい時代の始まりです。死は、単に私たちの生活の２つの舞台の間の分岐点です。農作物の農夫の植え付けを例にとって見てください。彼は、それに投資し、作物が熟し乾く時までそれを栽培します。それから、それを収穫し、彼が、今年必要な穀物を使い備蓄できるようにします。収穫は、その時期に植え付けと栽培が行われた作物の発育における

１時期の終わりです。そこで、作物を刈り取る前は、苦労と経費がかかるばかりでしたが、彼の努力の実を享受するのはその後なのです。

私たちの生活もまた同じことです。この世で私たちは、あの世の作物に投資し栽培しています。耕作されていようが不毛のまま放棄されていようが、各々、畑を所有しています。生産性があろうが並であろうが、種を使ってきました。作物を蒔いた後、それを世話してきたか放ってきたかのどちらかです。私たちが、庭にとげを栽培したか、花を咲かせ実をつけたかのどちらかなのです。私たちは、作物の改良にエネルギーをつかってきたか、それとも不必要で無関係な仕事に時間を無駄にしてきたかです。この作物の準備期間は死ぬまで続きます。私たちの死ぬ日は収穫の日なのです。この世に目が閉じるとき、その目は死後の生活に開くでしょう。そしてそこに、生涯私たちが忙しく

栽培してきた作物が私たちの前に現れます。

農業に従事している人々は、収穫をするものであることを思い起こしなさい。そして彼は、蒔いた作物だけを刈り取るでしょう。このように、死後の世界で、死に先立ち、彼のために用意してきた収穫を刈り取るでしょう。穀倉地帯に対して、彼が栽培してきたと同じだけの穀物をえること、そして、農作物は彼が蒔いたものと決して別のものではありえないことを、すべての農夫はよく知っています。このように、死後の世界では、現世の努力いかんによって報われるでしょう。死は、苦しみと努力のために彼に割り当てられた時間の終末の最後の宣告です。そして、死後の世界は、しかるべきその結果を体験できる最後の場所です。死後には、更なるがんばりの機会はないでしょう。死後の世界には、決して終わりがないということが心に生まれてくるに違いありません。

これはなんと危機的問題でしょう！彼が晩年、この熟慮した理解にたどり着くことができたとしても、死後となっては、その真実に気づいても遅すぎます。なぜなら、後になって気づいても役に立たないでしょう。そのとき、人の過失の重大さを考える時間はありません。悔い改める時間もありません。そして、本当に期限切れまで時間がないのです。人間は、運命に気づいていません。一方で、時間は最高速度で農作物の刈り取りを彼にしいてきます。かれは、世界の利益を手に入れることに忙しく従事しています。そして彼自身、価値のあるものに従事していると思っています。であるのに、実際、彼は、ただ貴重な時間を無駄遣いしているのです。彼のために、将来の繁栄を保証するすばらしい機会を持っています。しかしその代わり、彼は重要でもないつまらないことに従事することを選んでいます。主は、終わりのない

名誉と無常の幸福の場所である楽園へと彼を呼んでいます。一方彼は、無知なことにはかなく、消えてしまう楽しみに没頭しています。彼は、節約していると考えていますが、しかし実際は浪費しています。この世にマンションを建てている間、彼は　生活のために建てているとの幻想のもとに働いています。けれども、実際は、粉々になって何も残らない砂の壁を建てているのです。

人間よ！あなたが現在していること、そして、あなたがすべきことに気づきなさい。

９神は生活の方向を定める

地球は太陽の衛星です。常に太陽の周りの軌道に乗って回っています。そのような回転を遂げるに１年かかります。この太陽のまわりを回る地球の動きは地上の生命体が健全に機能するために

不可欠です。もし、地球が太陽の周りを公転しないなら、その存在は何の意味も持たないでしょう。そして、生命は途絶えるでしょう。これは、私たちがどのようにこの世で生活を送るべきかについての実践的な例です。この例は、ほんとうに、あたかも地球が太陽の周りを公転しているように、人間は、どのように神の回りを回るべきかを示す物理的実証です。それは、すべての人間の活動は神に基づくべきであることを意味しています。

地球は自然法によって回転を余儀なくされています。しかし、人間は、彼自身の自由意志で神に降伏すべきです。人間は、神の概念に基づいた生活を立てるべきです。この意識は、人間の真の上昇です。この意識の中に、すべての成功の秘密があります。神に方向付けられた生活は、神を見出すことに始まります。男女に関わらず、神を知ること、それは真実を知ることを意味します。そして

この真実は、彼ら全体にいきわたります。真理を見つけたという感情は、とてもスリルのある体験なので、永遠に続く確信で彼らを満たします。この永遠に続く確信は、彼らの生活からすべてのフラストレーションを取り除きます。ですから、損失はもはやなく、それらの代わりに、彼らは最も偉大な資産、つまり、神がそれでも彼らと共にいるという感情を決して失うことはないのです。

人間は神の創造について熟考することにより、この認識を体験します。現在の宇宙は神の特質の表現です。それは完全な神の紹介です。ちょうど人間が鏡の中に自分の投影を見るように、明らかに神は彼の創造物の中に見えます。

空間の広がりは、神つまり創造者が無限であると人間に告げています。太陽や星々を観察すると、私たちは神がすべての光であることが分かります。山の高さは、神の偉大さを私たちに示しています。

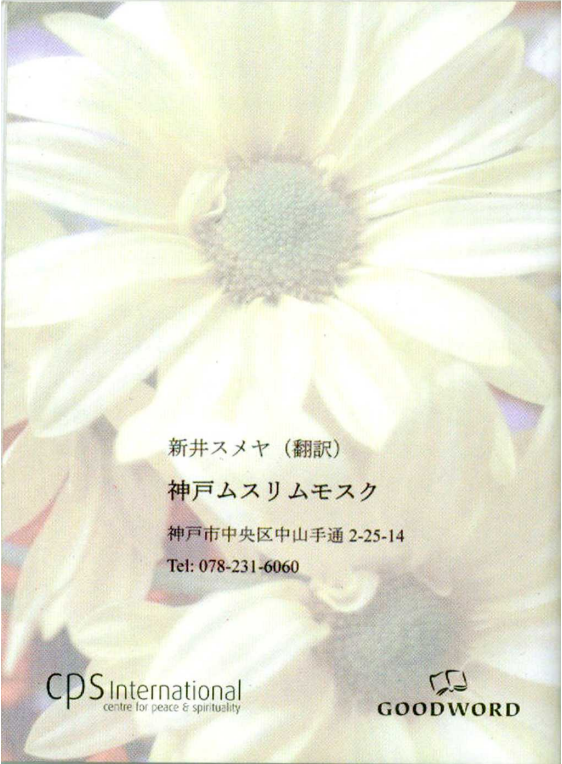
海の波や川の流れは、神が無限の恩恵の宝庫であることを告げます。

木々の緑に私たちは神のとんだ豊かさを見ます。人間の存在は、神のそれの証拠になります。体に感じる気の流れは、神のタッチです。鳥たちのさえずりに人間は神の歌を聞きます。人間にとって、神に定められた生活は、神を覚えることにより始まります。人間は、神の存在を感じ始めます。すべてのことが、彼に神について気づかせるように働きます。神の思い出は、彼の心から決してなくなることはありません。彼は、朝夕を、あたかも神の隣に生活しているかのようにすごします。あたかも雨で作物が再び満ちるように、彼は神の思い出にいつも没頭したままでいます。

神は人間に関心を寄せています。心が神に愛着を持っている人は、どんな時も、精神的な体験をします。神を信じることは、彼にとって精神的発達

の源になります。神の愛に満たされ、彼はもはや何も必要としません。彼にとって神は、今までに体験してきたどんな制限もない、彼が泳ぎ続けるための広大な海になります。精神的に目覚めた形態で、ほかの何に対しても、なんら必要も感じないような大きな富を受けます。

神を見出す人は、彼にとって宇宙全体は、彼に開かれた神の本になります。１枚の木の葉は、神の本の１ページになります。

太陽を見るとき、彼はあたかも神の本をはっきり読めるよう神が天の聖火を照らしているように感じます。宇宙は、例えて言えば、すばらしい大学に、彼はその生徒になります。

神を知ることは、神の愛の中心を知ることです。人間は生まれ、彼よりずっと上位の最高のお方、あらゆる制限がなく、彼の感情の中心を形成する

かもしれない、要するに、神を知った後、大人が、母の腕に抱かれた後の子供のように満たされるお方を探します。この神の知は、神のほかの何かを神として認めることや、誤って非現実的にそれを生来備わっている衝動に対する答えであると思うことから人を助けます。神の知は、男女の神を知りたいという真の衝動を満たすことです。神を知り損ねることは、人間の最大の必要を見出すことに失敗することを意味しています。

神を知り損ねる人は、彼の生来の衝動によって、神のほかの何ものかに神の地位を与えることを余儀なくされます。この地位は、時にはある人間、時にはある動物、時には自然現象、時にはある物質の力、時にはある想像上の概念、そしてまた、時にはただそれ自体を神と思ってしまいます。

もし、人が神を知り損ねたとしても、あるいは、彼が神を否定するものとなっても、神を知りたい

という本性の衝動を抑えることは、男女どちらの力の中にもありません。それは、神を知らずにきたそのような男女が、必然的に神として、神のほかの何ものかを信じる理由です。そして、この想像上の神は、いつも何か生き物か、または神の他のものです。本来、人間が神として真の神を受け入れないことは可能です。しかし、だれかが神のほかの何ものかに対して神の地位を与えることから、自分自身を守ることは可能です。神を崇拝の対象とすることは、人間の地位を高めます。逆に、神のほかの何ものかを神として認めることは、人間性の水準から結果として落ちぶれていくことになります。神への服従は、人間と宇宙のどちらにも、たった１つの在り方なのです。

新井スメヤ（翻訳）

神戸ムスリムモスク

神戸市中央区中山手通 2-25-14

Tel: 078-231-6060

CPS International
centre for peace & spirituality